
英雄の王と異常の王

さんぱい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の王と異常の王

【Nコード】

N2382BA

【作者名】

さんぱい

【あらすじ】

もし冬木に箱庭学園があったら、こんな出会いもあったのかも知れない。そんな妄想。 fate は原作終了後、めだかは原作開始前です。キャラ崩壊等を含みますのでご注意ください。

（前書き）

この小説は、都城さんとギル様って見た目も中身も似てるなーと思
って書き始めたものです。

それに共感できなくても特に問題はないので優しい心で見てください
と幸いです。

「えへへ、見て王土。なんか向こうに王土みたいな見た目の人がいるよ」

実験のために学校へ向かう途中、僕が王土にその声をかけたのはただの世間話のつもりだった。

「む、ああ、確かに似ているな。まあ偉大なる俺の真似をしたいという気持ちはよくわかる。仕方ないだろう」

王土もいつもの軽いノリで返してくれた。こいつはちょっと切れやすけれど基本的には割といい奴なんだ。

だから問題は。

「ん？何だ貴様。雑種のくせに随分生意気な格好ではないか」

そいつがボクたちに気づいたことだ。

「だが貴様のように中身の伴わん奴が我^{オレ}の真似をした所で目障りなだけだぞ？クハハハハ、普段なら極刑ものだが今我は気分がいい。

見逃してやるから疾く失せろ」

なんてことを見知らぬ男から言われて、黙っていられるほどには王土はいい奴じゃない。

「ふん、偉大なる俺に向かってなんて口を聞いている。そも同じ目線で話すなど無礼であろう、『ヒレフセ』」

その瞬間、すごい音を立ててその男が崩れた。王土の持つ『異常』を使って目の前の男をひれ伏させたのだ。

たまにあることなので、やっちまったかーぐらいの気持ちで見えていたのだが、次の瞬間、ボクは気を失いそうになった。

あまりにも強い自我。

すぐ横にいる王土もかなりの自我を持っているが、それよりもはるかに強い。

普段王土の側にいると、他人の『声』はそこまで聞こえてこないが、これはもうそんなレベルじゃない。

いつもの王土のような心休まる自我じゃなく、かつてのような雑音でもない。

たとえるなら濁流。全てのものが飲み込まれていくような濁りきって真っ黒な濁流。

ボクにはそれがなんなのかわからない。

人が目の前には空気があるとわからなくても理解しているように、ボクも彼が持っている感情が悪意だとわからなくても理解した。

ただそれは心が読めるからみたいなのが理由じゃなくて、もっとなんか本能みたいなもので理解しているだけだ。

僕は今まで王土以上に化物みたいなやつを見たことがなかったけれど、これは断言できる。

こいつは王土より『異常』だ。

「この俺をここまで愚弄するとは・・・いい度胸だな、雑種う・・・」

王土の『言葉の重み』などまるで物ともせず、にそいつは立ち上がる。やばい。殺される。

本気でそう思った。

もしかしたら手があるかもしれないと原因である王土を横目でチラリと見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あ、だめだこいつ。パツと見は平気そうに腕なんか組んでいるけれど、脂汗とかかいてるし。

王土は見た目に反して予想外の事態に弱いのである。そこがまた彼の魅力でもあるのだけれど。

・・・まあしかたないか。実験が途中で終わっちゃうのはちょっと気がかりだけど、王土と共に死ねるならそれも悪くないかな。

こいつは孤独な『王者』だけれど、死ぬ瞬間くらいはボクと一緒にもいいだろ？

「もはや肉片たりとも残さぬぞ！せめて死に様で我を愉ませろ！」

その瞬間、その男の背後の空間がねじれた。

言っている意味が分からないと思うけど、ボクもわからない。なんだあれ。あれがあいつの能力なのか？

でもここまで人間離れした『異常』は見たことがないぞ。

「『ゲート・オブ・バ』なにをしているのですか！』『いたあ！』」

と、僕が現実逃避まがいなことを考えていると、その男の背後からものすごい勢いで走ってきた金髪の女の子がそいつの頭をおもいきりぶん殴っていた。

「何をする、つてセイバー!？」

「あなたこそ何をしているのですかギルガメッシュ! ご飯の時間になっても現れないから探しに出てみれば、一般人を相手に宝具を展開だと!？あなたはバカなんですか!」

「我を探しに来た?なんだ、我が恋しかったのか、セイバー?」

「シロウとカレンに頼まれたからです! そんなことはどうでもいい! 今回の件はカレンに報告させて頂きます」

「なっ! 貴様セイバー! それは卑怯ではないか!？」

「いいえそんなことはありません。せいぜい重い罰を受けてください。それと、あのお二方にもきちんと謝罪を」

「謝罪!？この我が! あのような雑種相手に!？」

「当然です。あのように怯えて、さぞや恐怖したことでしょう」

そう言つて僕らの方を向く女の子(セイバーさん?)。彼女がいてくれなかったら今頃僕らは生きてはいなかっただろう。先ほどまでの男(ギルガメッシュ?)の濁流のような自我もなりを潜めている。そのことには感謝するが、正直謝罪とかどうでもいいからとっとと連れて帰って欲しかった。

ふと隣の王土を見ると、先ほどまでの脂汗もすっかり引いて普段の余裕を取り戻している。

気に入った女の前では強がるタイプなのだ。彼女は確かに凜としていて王土のタイプだろうね。

まあ彼女は目の前の男のコブ付きらしい。さすがに王土もあれの直後に彼女を口説こうとは思わないだろうが、やっぱり弱いところは見せたくないのかな。怯えてるってバレちゃってるけど。

「さてセイバー、話を聞け。そもそもだな、今回の件は向こうから仕掛けてきたのであって……」

「嘘をつかないでください。彼らが魔力を持っているようにも見えませんが、あなたに危害を加えられるとは思えません。大方変な難癖をつけて絡んでいたのでしょうか？」

「いや、我にもよくわからんが、変な魔術をだな……」

「問答無用です。早く謝罪を」

「ぐ、ぐぐぐ……」

うわーすごい睨まれてる。先ほどのような殺気こそないものの、あれの名残で非常に怖い。

結局、数分間互いに睨み合った挙句、

「おのれえ！覚えていろ！雑種共おおおおお！！！」

そういつて走って逃げてしまった。

「あ、待ちなさいギルガメッシュ！……まったく、申し訳ありません、お怪我はありませんか？」

「大丈夫だよ」

「気にすることは無い。偉大なる俺を楽しませるいい余興だった」

「え？」

「い、いや、なんでも無いよ。それじゃあ助けられてありがとう、王土！行くよ！」

「む？おい、行橋。なぜそこまで急ぐ」

「なにいつてんの！宗像くんより早く行かないと襲われちゃうよ」

「そんなもの、俺の王の力があれば造作も無い」

「だから、宗像くんが怪我しちゃうたらかわいそうでしょ、いい子なのに」

「……まあいい。下々の者の進言を聞き入れる度量すら偉大なる

俺は持ち合わせている」

王土の返答にぼかんとした彼女を残して、僕は王土の手を引いて箱庭学園へと向かう。

危ない危ない。せつかく助けてもらった命を無駄に不興を買って危うくする必要はない。

さっきの言葉を見るに、いきなり襲いかかっては来ないだろうけれど、もし何か王土の琴線に触れてまたアレを使ってしまったらと思つと……。

普段ならあーあで済むけど今回は洒落にならないかもしれない。おとなしく学園に向かおう。

「別に宗方くんより遅くてもエレベーターを使えばいいんじゃないか？」

「僕も王土も使えないでしょ……」

「使える奴に命令すれば……」

「そう素直に聞いてくれないと思うよ。まあ軍規くんなんかはやってくれそうだけど」

まだなにか言っている王土を連れて学園へ向かう。まったく、そんなにあの女の子と話したかったのだろうか。

お前のせいで危うく死にそうだったというのに。

……まあいいか。

どうせもう彼らに合うことはないんだろうし。

(後書き)

以前、今連載してるものとこれのどちらを連載しようか迷い、結局これは話がふくらまないからとボツにしたものをせっかくなんで上げてみました。

もしこれを連載していたら、f a t e側ではセイバーとギル様の夫婦漫才と凜、桜、カレンによる正妻戦争。めだか側では王土様と行橋をメインに裏の六人含める十三組の十三人のほのぼの？日常。時々二つの陣営が干渉し合う、みたいな話になってたと思います。

まあ即行ネタ切れが関の山だったと思うんでこっちを選ばなくて正解でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2382ba/>

英雄の王と異常の王

2012年1月6日00時47分発行